

(資料)

## 御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻(二)

小\* 林 法 子

### 三 驪黄物色

驪黄物色

さきにふれたように御花本の原本は狩野尚信筆「驪黄物色図」である。しかし「驪黄物色図」は独立した絵画作品として制作されたものではなく、「驪黄物色」と名づけられた馬書の図の部分である。「驪黄物色」命名のことは、十和田市馬事公苑称徳館蔵黒沢定幸編輯、弘忠校正「驪黄物色図説」(以下、称徳館本と称す)の、定幸の題辭に記される(資料一の一)。これによると定幸は幕府の厩にあつめられた馬と牛百十二疋について、漢名と和名を比較検討して名称をさだめ、五行に配して分類、また牛馬の旋毛

の所在をあきらかにし、その吉凶を述べた（註二四）。それらの説を正しくつたえるために、かれは狩野尚信に図をえがかせた。図説完成ののちにかれは林羅山に題号を乞い、羅山はこれのみを「驪黄物色」と命名した。

「驪黄物色」はこのように説と図にわたる命名であったが、写本のほとんどは説と図が別々につたわっている。それらの題名も、御花本の留書には「漢名百馬」とあり、説の部のみにもかわらず「驪黄物色図」と称する例もあり、区々である。本稿では統一をはかり、原則として、「驪黄物色図説」を説の部の題名とし、画の部を「驪黄物色図」と称している。

関与した人々と編輯の事情

「驪黄物色」の編纂をおこなった黒沢定幸は『寛政重修諸家譜』（註二五）によると、諏訪部宗右衛門定吉の二男として誕生、黒沢重久の養子となった。実父定吉は、徳川家康につかえ、八條近江守房繁伝来の馬術に長じたため、御馬の事を命じられた。定幸の実兄定矩、実弟成定も幕府の馬預をつとめている。養父重久も徳川家康の臣、重久より前は代々奥羽地方に居住していたという。重久の馬事は不明であるが、良馬の産地奥州ゆかりの家との縁組みであった。

定幸は元和元年（一六一五）徳川家康に初御目見、翌年大番に列した。「驪黄物色図」の序に、命を奉じて駿府の林羅山に療馬集の文字を問うたとあるが、この頃のことであろうか。寛永四年（一六二七）に馬預となり、そのちしばしば陸奥国や武蔵国に赴いている。寛文十一年（一六七二）歿、享年は不明である。

定幸をたすけた弘忠は雲州松江藩の儒者黒沢石齋である。弘忠については佐野正巳氏の著書にくわしく（註二六）、伊勢の出身、若くして江戸へ出て、黒沢某の家に寄宿した。そのち、おそらく定幸の紹介で林羅山に入門、羅山の推挽により寛永十八年（一

六四一)に松江侯の儒臣となった。

定幸は、学究的な性質をそなえたひとであつたらしく、幕府の馬預となつたのちに『相驥鑑』(註二七)を編輯している。『相驥鑑』は中国の馬書や経史、諸家書を典拠として相馬法、牧養法、療病法をまとめた書で、寛永十六年(一六三九)の定幸の自題、同年六月の林羅山の序、寛永十八年(一六四一)七月、当時尾張藩儒であつた堀杏庵(註二八)の跋がある。この『相驥鑑』に、寛永二十年(一六四三)弘忠はきわめて詳細な注釈をつけて『補註相驥鑑』(註二九)をあらわした。『補註相驥鑑』には、この年来日した朝鮮通信使朴安期の序をえている。

また、時期は不明ながら、定幸は徳川家光の敕命をうけて「百馬図名」を献上したという。大田南畝の「一話一言」によると(註三〇)、馬名九十の漢名を列記、各々に林羅山の倭訓を付す。この「百馬図名」の図の有無、「驪黄物色」との関係も不明である。称徳館本「驪黄物色図説」の凡例(資料一の二)をみると、たしかに羅山の多識編も参照しているが、和漢の引用書二十八篇の一にすぎない。「百馬図名」の馬名とその排列は、冒頭より三十一疋は、称徳館本の乾巻のはじめより三十一疋とその漢名、排列とも一致する。これにつづく部分では排列は一致しないが、「百馬図名」におさめる漢名はすべて称徳館本にふくまれており、「百馬図名」と「驪黄物色」が密接な関係にあることはあきらかである。

称徳館本の定幸の題辞も、「驪黄物色図」諸模本の序跋や奥書も、その編纂が公的に命じられての事業とは記さない。しかし家光へ献上した「百馬図名」とは「驪黄物色」であり、世に流布した「百馬図名」の原本は「驪黄物色図説」の馬名の一部をぬきだしたものであつたかもしれない。あるいは「百馬図名」献上の敕命が、「驪黄物色」編纂の直接の契機であつたのかもしれない。いずれにせよ、『徳川実紀』などに散見する幕府の厩馬の充実、乗馬や騎法の上覧や鷹狩り、朝鮮国王や阿蘭陀人からの駿馬献上などか

ら推察される將軍家光の馬術愛好が（註三一）、定幸の馬書編輯の意欲をかきたてたことはまちがいないであろう。

図を制作した狩野尚信は幕府の御画師。「驪黄物色」成立の正保四年（一六四七）は四十一歳、歿するわずか三年前である（註三二）。この頃のくわしい動向はわからない。前年、正保三年（一六四六）は九月末から十二月中旬まで京都に滞在し、文雅慶彦から依頼された三幅対の制作をおこなっている（註三三）。この年の十二月二十二日には江戸へむけ出立したはずであるから（註三四）、「驪黄物色図」は翌年、江戸において制作されたことになろう。尚信への制作依頼の理由もあかされないが、幕府の馬預が編纂し、儒官の序跋をよせる馬書に、幕府の御画師が図をかくことは不自然ではない。しかも、尚信は、いまだ將軍秀忠存命中にもかかわらずまず家光に御目見得し、直ちに御用をおおせつけられたとつたわり（註三五）、江戸へ召されたのも寛永七年（一六三〇）、家光の將軍就任ののちであったように（註三六）、家光とのつながりはつよい。

称徳館本の奥書の一には、定幸の末裔の談として（資料一の四 註三七）、「驪黄物色図」の制作にあたり定幸が尚信に驪骨毛色を口授し、尚信ははじめて画馬の精妙を覚えたと欣喜したとつたえている。「驪黄物色図」は、馬事重視の気運のなか、幕府馬預定幸の知識と、御画師尚信の画技とが相呼応して生まれた作品であった。

#### 驪黄物色図の構成と図様の由来

「驪黄物色図」の原本の伝存は確認されていないが、「驪黄物色図」が「驪黄物色図説」と一具であるなら、全体の構成も「驪黄物色図説」にしたがっていたとかんがえるべきであろう。

「驪黄物色図説」の諸写本の体裁はほぼ共通しており、内容を確認することのできた七例（註三八）のうち、称徳館本など六例

は乾坤巻をつうじて、分類、馬名の排列をほぼ同じくする。ただ一例、岩瀬文庫の「驪黄物色図説」（以下、岩瀬文庫本と称す）だけが、乾巻では分類も馬名の排列もほかの六例とほぼ同じであるにもかかわらず、坤巻では分類、排列もことなり、牛の部分も欠落している。

本稿では、内容を同じくする六例の構成を「驪黄物色図説」の原状に近いものと想定し、題辞をそなえる称徳館本をその代表として、称徳館本系と称する。称徳館本の分類は、乾巻が「木色馬一十三疋」、「火色馬二十一疋」、「金色馬一十三疋」、「水色馬一十疋」、それぞれに「土色馬」もふくむとする。坤巻は「駁馬二十疋」、「駁毛凶馬一十六疋」、「善旋毛馬二疋」、「悪旋毛馬三疋」、「悪旋毛牛二疋」、「犂毛凶牛四疋」、「犂毛吉牛八疋」である。牛馬の総数は、定幸が題辞にいう「馬牛一百一十有二疋」となる（註三九）。これとことなる岩瀬文庫本の坤巻では、「駁毛馬二十四駁毛凶馬一十六匹」と「善旋毛馬二匹悪旋毛馬三匹」に二分する。そのため、吉凶善悪は混在する。この不都合から、岩瀬文庫本の原本の成立は称徳館本系の原本よりおけると推察される。

「驪黄物色図」では、称徳館本系「驪黄物色図説」の排列にしたがって馬、牛はならべられ、御花本の原状として想定したように、上巻巻頭に羅山の序、馬師皇図、下巻巻頭に郭璞図、牛の図のあとに鷲峰の跋があったと推察される。そして、尚信は牛馬を、毛色識別が容易であるように、近景の描写対象として大きくえがき、背景は御花本のような簡素な自然景をえがきそえたとかんがえられる。

では、そこに配された牛馬の形姿はどこからえられたものであろうか。参考となるのは、フィレンツェ市立ステイッペルト美術館蔵群馬図巻（以下、ステイッペルト本と称す 資料二の二四 註四〇）である。この画巻には狩野山雪との落款、寛永十八年（一六四一）九月の那波活所の跋があり、この跋からすると原本は狩野山雪筆馬毛同異図、これはその模本である。巻頭に文山なる

ひとの題があり、これが書家佐々木文山（註四一）であれば、元禄年間前後の模本となろうか。いにしえより馬の毛色は三十三種とつたわると跋に述べるように、三十三疋の馬をえがき（註四二）、それぞれの傍らに和名を漢字表記する。画像によって形姿を確認した三十疋のうち、御花本と同形姿あるいはきわめて類似するものは二十疋である。なかでも踞る馬など六疋はほぼ一致する形姿で御花本にみいだされる。原本を活動時期のかさなる京狩野の山雪と江戸の尚信とする馬図において、偶然の一致とするには躊躇されるほど近似する図様のみられることは注目し値する。

山雪は、寛永九年（一六三二）に林羅山の依頼によって歴聖大儒像を制作している。山雪は下絵作成にあたり、羅山のみならず堀杏庵へも意見をもとめるなど緊密な交流があった（註四三）。さきに述べたように黒沢定幸の『相驥鑑』は羅山の序、杏庵の跋をもつ。『相驥鑑』の杏庵の跋は寛永十八年（一六四二）の七月、馬名同異図の活所の跋は同じ年の九月に記されている。この時期、藤原惺窩門の四天王（註四四）とされる羅山、杏庵、活所の関心事のひとつに馬があったといえる。かれらが「驪黄物色図」の成立に関与し、かれらを通じて尚信が馬毛同異図をみた可能性も否定はできない。しかし、個々の形姿には近似がありながら、排列や場面設定には大きなへだたりもあることから、ステイッペルト本と御花本の類似は転写の故ではなく、山雪と尚信の画囊に共通するところがあったとかがえたい。

このステイッペルト本にも、のちにふれる驥毛図解にも、手本や祖本としての中国画が存在した可能性が指摘されている（註四五）。もちろん、ステイッペルト本のみならず御花本にもただ一疋えがかれる瘦馬は（註四六）、翼開の駿骨図巻（註四七）や任仁発の瘦馬（註四八）のような先例なくしての採用はかんがえがたく、御花本において牛の首部分を比較的細く長くえがくところも、李迪筆帰牧図（註四九）や狩野探幽の学古帖に戴嵩に学んだとしてのせる牧牛図（註五〇）にみられるような水牛の描写に由来す

るとかんがえられる。しかし、「驪黄物色図」の場合は「驪黄物色図説」と一具であることから、特定の画卷を手本としたのではなく、図様の源として、中国画もふくむ、たとえば室町時代の年紀を有する鳥類図巻（註五一）のような、狩野派のなかで蓄積された牛馬図集の類を想定したい。

それでは、尚信は何故牛馬を野辺に放ったのであろうか。牛馬の図鑑であれば、たとえば伝韓滉の五牛図巻（註五二）や駿牛図（註五三）のように、できるだけ來雑物をさけて、並列させてえがくのが適切とおもわれる。しかし尚信は、横に長くつづく画面をいかして、牛馬のさまざまな形姿の連鎖がうみだすおもしろさをもえがこうとしたらしい。そのために、牛馬は自然のなかで自由にあそぶすがたにえがかれた。もちろん一方には、尚信が目にしたと確認することはできないが、李公麟の臨韋僂牧放図（註五四）や張穆の滾塵図巻や八駿図巻（註五五）のように、野に放たれた群馬が主たる題材の画卷もある。しかしながら、それらにみられる自然景観と、ときに遠く近く配された馬たちとの合理的で調和のとれた描写にくらべて、たとえば御花本の自然描写はあまりにも簡略で具体性に欠ける。毛色の識別というこの画卷第一の役割をそこなわず、観賞にもたえる絵画としての表現を模索した結果にちがいない。

#### 四 「驪黄物色図」の模本と類例

御花本の位置づけ

「驪黄物色図」の模本は「驪黄物色図説」の写本よりさらに多様である。御花本の場合、上巻は、二疋の馬（註五六）をのぞく

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（二）（小林）

と称徳館本乾巻と同じ排列であるが、下巻と坤巻では、牛馬名は共通するが排列は一致しない。その排列は岩瀬文庫本坤巻に近いが、同一ではない。「驪黄物色図」の諸模本それぞれに典拠として対応する「驪黄物色図説」があったか否かは確認できない。模本の多様は、「驪黄物色図説」と「驪黄物色図」の対応関係がしだいに希薄となり、図の部が独立して転写される場合もあったことを推測させる。

「驪黄物色図」の模本、類例とかんがえられる作例を資料二としてあげた。これらの多くは複写、部分写真、論文の記述によっているため牛馬名をはじめとして詳細は不明である。およその傾向として、序と跋、馬師皇図、郭璞図、そして牛の部分はいしばは欠落している。そのためこの項では、おもに馬の部分、その形姿と排列に着目して、御花本はじめそれぞれの画卷の相互関係を検討した。

前項で仮定したように「驪黄物色図」の原本が称徳館本系「驪黄物色図説」にしたがって制作されたとすれば、これにもっとも近似する構成は東京藝術大学蔵馬師皇巻（以下、東京藝大本と称す 資料二の一）にみいだされる。東京藝大本は、序跋の位置は逆転しているものの林羅山と鶯峰の文、馬師皇図、郭璞図、馬九十八疋、牛十四頭、牛馬名をそなえ、画中に尚信の落款があり、常信模本として栄川の所持していたもののうつつである。

東京藝大本の上巻ではただ一箇所、称徳館本系「驪黄物色図説」乾巻の馬名の排列とことなる箇所ある。称徳館本では「赤驪」、「驪」、「粉背驪」、「驢」とならぶが、東京藝大本では「赤驪」、「驢」、「驪」、「粉背驪」とつづく。これは、「驢」を仔馬として、母馬に見立てた「赤驪」のお乳を飲むすがたにえがいたためである。この四疋はかさなるようにえがかれており、小さなからだの「驢」が母馬の前面に配されるのは自然である。下巻は、称徳館本系「驪黄物色図説」坤巻の分類、排列との対応はみいだせない。



ところが、この下巻の排列はさきに御花本の下巻に近いと指摘した岩瀬文庫本の坤巻の排列とほぼ一致する。ひるがえって、東京藝大本上巻を岩瀬文庫本乾巻と比較すると、「驢」のほかに、「駱」の位置もことなっている。「駱」の位置は、「驢」の場合のような、図様のうえでの必要とはかならずしもいえない。馬の排列における東京藝大本と「驪黄物色図説」の符合は、ある時点でそれぞれの原本が対応していたと想定するに十分な近さをもっている。仮に東京藝大本の典拠としての「驪黄物色図説」を想定するならば、称徳館本と岩瀬文庫本のあいだ、岩瀬文庫本に近い一本となろう。

では、この東京藝大本と御花本との関係はいかなるものであろうか。馬の排列は、まず上巻の場合、「驢」（御花本馬21）の位置は同じで、ともに称徳館本系「驪黄物色図説」とはことなっている。上巻においてこの二本がことなるのは「駟」の周辺五疋の部分と、「驢」と「駟油馬」の二疋である。東京藝大本では「駟」は地面にうずくまり背をみせている。そのとなりにやはりうずくまる「宿駟」、「斑駟」がならび、それらの背後に「赭黄馬」と「駮」が配され、この五疋でひとつの群れをなしている（図32）。この群れから四疋をへだてたところに、「驢」と「駟油馬」の二疋はかさねてえがかれている（図32）。このふたつの群れが、御花本では七疋からなるひとつの群れとなっている（図33）。つまり東京藝大本の「驢」と「駟油馬」は、「赭黄馬」（御花本馬36）、「駟」（御花本馬37）、「宿駟」（御花本馬38）、「斑駟」（御花本馬39）、「駮」（御花本馬41）の五疋の群れにとりこまれている。しかも、うずくまっていた東京藝大本の「駟」に御花本では「赭黄馬」、佇んでいた「赭黄馬」に「駟」と、逆の名が付されている。東京藝大本で一組をなしていた「驢」（御花本馬35）と「駟油馬」（御花本馬40）は、御花本では分離されて、佇む「駟」の左と右とに配されている。

この配置変更の理由は、画巻全体の構図に由来する。東京藝大本では、牛馬は体を接して、画面の手前から奥へとかさねてえが

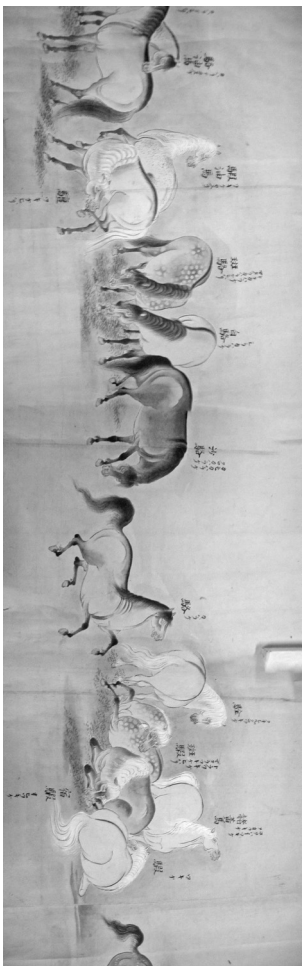


图 32 東京藝術大学所藏馬師皇卷・上卷 (部分)



图 33 御花史料館所藏百馬及牛毛物并定図卷・上卷 (部分)

かれる場合が多い。これに對して御花本は、群れとしてのまとまりを重視しながらも、群れのなかの馬の配置は密ではなく、となりあう群れの間にも比較的広い空間をとっている。そのために、東京藝大本では五足の群れは充実しつつ、その左右の馬たちともほどよい連続性をたもっていたが、御花本では「驢」、「駟油馬」をくわえることなくしては、「赭黄馬」(御花本馬36)の周辺は弛緩した構図に陥りかねない。さきにふれたように、東京藝大本において「驢」、「駟油馬」は、五足の群れから四足をへだてたところにえがかれていた。画卷全体に大きな影響をあたえることなく移動させるにもっとも適した位置と形姿の馬が「驢」、「駟油馬」であったのだろう。この移動にもなつて、毛色としてはきわめて類似する「赭黄馬」と「駟」の、名のとりちがえも生じたのであろう。

下巻における馬の排列もきわめて近い。ことなるのは、「駟」(御花本馬74)、「騄」(御花本馬78)、「驪」(御花本馬91)、「驎」(御花本馬84)と「騷」(御花本馬85)の五足の馬の位置にすぎない。位置が変わっても、同じ馬名の馬の形姿は同じである。東京藝大本において体をかさねてえがかれる「驪」と「騷」は、一組をなすその図様のままで移動している。東京藝大本では下巻の後半部分に位置していたこれらの馬は、御花本下巻のなかば以降に点々と配されている。この配置のちがいも、上巻と同じように画卷の構図から理解される。御花本では、いわばとりすぎた余裕を埋めるために、これら五足は移動させられたとみることができよう。このように、東京藝大本と御花本における差異を構図の必要から生じたものとめるならば、御花本は、東京藝大本系の「驪黄物色図」のひとつとして、東京藝大本からわずかな展開を果たした一本と位置付けることができる。この位置づけは、次項に述べるような諸模本の展開のあとを想定することによつても再確認することができる。

なお、東京藝大本と馬名、形姿、排列を同じくする模本としては、東京国立博物館蔵驪黄物色(資料二の二)、同じと推測される

例としてチェスター・ピーティ・ライブラリ蔵馬牛古図巻（資料二の三）があげられる。御花本（資料二の四）と一致する例が狩野文庫本（資料二の五）であることはすでに述べた。東京藝大本や御花本と強い類似性の期待される例は入札目録の驪黄物色図巻（資料二の六）と、牛図はそなえないが、馬の博物館蔵百馬図（資料二の七 註五七）、ギメ東洋美術館蔵馬相図（資料二の八）である。ギメ東洋美術館の馬相図は、これまでみいだしたなかで唯一絹本の作例である。

さまざまな展開

これまであげた諸模本は、馬師皇図、郭璞図や牛図の欠落があり、配置はいささかことなろうとも、馬の形姿は同一のものが用いられ、同一形姿の馬の名は基本的に一致しているか、あるいはそのように想定される。ところが、馬の形姿は同一ながら、それに付された馬名のことなる例や、新たな形姿の馬の導入のみとめられる例がある。

早稲田大学蔵百馬図（以下、早稲田大学本と称す 資料二の九）は、乾坤二巻に文字通り百疋の馬をえがく。ほとんどの形姿、その馬名が東京藝大本と共通する。しかし、錯簡の可能性もあるが、排列が四箇所のことなり、馬名のない馬九疋と東京藝大本と形姿は同じで馬名のことなる二組四疋の馬がいる。無名の馬のほとんどは東京藝大本のなかに類似の形姿をみいだすことができるが、乾卷のふりかえりながら走る馬、坤卷の前脚をたかくかかかってふりむく馬は東京藝大本系にはみられない。背景も、早稲田大学本は御花本よりもさらにひろやかで、流水には緩急の変化があり、満開の桜、柳樹や竹も馬と同程度の存在感をもつ。このような流水、植物の描写、動勢のままの馬の導入は、観賞画としての性格の強調がはかられた結果とみることができる。そして、同形異名の馬のみならず、名を付さない馬のふくまれることは、馬名よりも図様の継承が重んじられた転写の傾向を示している。

図様を継承しながら、馬名がなく、観賞のみを目的とした作品もあった。狩野昌運筆百馬図画帖（資料二の一〇）は、売立目録掲載の図版では郭璞図につづいて馬図があり、馬の形姿、順序は東京藝大本系らしい。画帖の一面を考慮した画面構成をとり、一画面には三疋程度の馬、それに渓流や梅樹などをそえている。筑後久留米藩の藩主有馬家に伝来した作品である。絵師の昌運は狩野探幽の末弟安信の高弟で、筑前福岡藩につかえた（註五八）。

称徳館蔵百馬卷（資料二の一 註五九）は一卷に馬六十疋をえがく。馬の形姿、排列は東京藝大本の上巻とほぼ同じで、排列のことなるのは三箇所、東京藝大本にない形姿の馬は五疋にとどまる。このような近似にもかかわらず、付された馬名は東京藝大本との一致をみない。ただし、馬名そのものは、漢名の三分の二が東京藝大本と共通する。基本的には「驪黄物色図説」にもとづいて制作され、当初は二巻本であった可能性がたかい。画卷として東京藝大本系の図様をつよく継承しながら、個々の馬の命名は独自の解釈が導入された例といえよう。収蔵のおりの台帳には、原画は狩野探幽、湯川玉流の模写とある。

岩瀬文庫蔵百馬図（資料二の一二）は折本装のため、卷子装に準ずる画面が確保される。背景はなく馬百疋をえがく。馬の形姿は、脚の屈曲や頭の傾斜角度などのわずかの差異を無視するなら、すべてが東京藝大本にみいだされる。それらは、一疋の場合もあるが、多くは数疋からなる群れの図様として継承されている。しかし、馬の排列、群れの配置の順は東京藝大本と一致をみず、馬名も和名を主として漢名がまじる。「驪黄物色図説」とことなる典拠が想定されるが、部分としての図様の継承はきわめて明瞭である。奥書によると、この百馬図の原画は根岸御行松家の第五代狩野友甫安信、転写をかさねているが、直接の手本は住吉内記蔵本である。

馬の博物館の驪毛図解（資料二の一三 註六〇）は、「驪黄物色図説」よりも細分化された五性十毛の分類をとる。巻頭に貞享四御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷（二）（小林）

年（二六八七）京都の儒者熊谷立閑の序、巻末に元禄九年（二六九六）原田宗如の落款をもつ。宗如の伝は不詳であるが、立閑の序からすると馬術を家職とした人らしい。序や分類一覧などのあとに馬師皇図、馬図とつづく。馬師皇は立像で、中空の龍へ手をさしのべる（註六一）。馬は百三十疋、ややゆるやかに形姿の一致をいうなら、東京藝大本にない形姿の馬は九疋にすぎない。馬名は「驪黄物色図説」と大きくことなり、多数の異名や和名も書きいれている。編者独自の見解にもとづく毛色が、五性十毛の分類のもと、東京藝大本系の馬に由来する形姿に著色されたのである。東京藝大本系の図様の影響力のつよさを確認することができる。

背景は、東京藝大本よりも早稲田大学本に近く、ほぼ一致する図様の岸边と波頭もみられる。植物の多さは早稲田大学本にまさる。上巻には桜、山吹、撫子、芙蓉、菊、薄、枯れ芦、下巻では桜、藤、躑躅、菊、萩、薄、枯れ芦、巻末の雪と、ともに四季の推移が意識されている。これまでにあげた模本にくらべて賦彩も濃く鮮明で、毛色の識別とともに、目を楽しませることも意図した画巻といえる。驪毛図解とほぼ同じ図様をもつとおもわれる百馬図巻もあり（資料二の一四 註六二）、知的好奇心にも応える濃彩の画巻の需要が推察される。

驪毛図解にきわめて近い一例が、馬の博物館蔵馬四十八種（資料二の一五）である。馬の形姿、その馬名ともに、驪毛図解下巻の一部分と一致する。ことなるのは、四季ではなく十二箇月の景物をえがきこむ点にある。現状では、三月のひばりと藤から、十一月をのぞいて、十二月の雪景に鴛鴦まで、定家詠十二ヶ月和歌花鳥図の図様がみいだされる。元禄年間には刊本としても流布したこの図様（註六三）の導入は、毛色識別という実用からはなれないまでも、観賞の具として、時流に応じた工夫をもちこむ制作のあったことをあきらかにしている。

この馬四十八種は原画を狩野安信筆とする。安信の歿年は貞享二年（二六八五）のこと（註六四）、驪毛図解の成立前に歿してい

る。馬四十八種の構図の窮屈さは、驥毛図解に花鳥図を織りこんだ結果とみられ、現状からは馬四十八種よりも驥毛図解が先行すると推察される。それゆえ、馬四十八種に記す安信の名は、驥毛図解や馬四十八種が依拠した画卷の成立に、尚信の弟安信が関与した可能性を示唆するものとかんがえたい。

また、大坪定易撰馬相図（資料二の一六、一七 註六五）も、東京藝大本系の図様の影響下にある。ギメ東洋美術館所蔵の馬相図模本には、元禄十年（一六九七）の大高坂季明の序、橋保春、有本英達の後序がある。これらによると定易は黒沢作百馬図と同じ馬百二十疋に、雜異馬十二をくわえた百三十二疋をとりあげたという。『海外所在日本美術調査報告』掲載図版の五疋は、馬名はことなるが、東京藝大本と同形姿、同一順序である。驥毛図解と同様、毛色の解釈は独自であるが、馬の形姿は東京藝大本系の画卷のそれを踏襲しているとおもわれる。

このほか、冊子装で、馬の形姿、排列ともに東京藝大本系に近似する例として、国立国会図書館蔵驥黄物色図（資料二の一八）、盛岡市中央公民館蔵百馬之図（資料二の一九 註六六）、岩手県立図書館の百馬百毛図（資料二の二〇 註六七）がある。国立国会図書館の驥黄物色図は卷子装の図様をほぼそのまま冊子装にうつしかえたもの、盛岡市中央公民館と岩手県立図書館の例は、半丁に一疋宛をえがく。卷子装では群れとしてえがかれていたものも、群れのなかにいたときの形姿そのままにえがかれている。

東京藝大本系「驥黄物色図」の馬の形姿、群れの図様は、馬名や分類がかわるうとも、くりかえしもちいられている。このことは、尚信の「驥黄物色図」の図様が馬書における馬図の規範としてはたらいっていたことを示している。

## 類例

このほか、五性十毛の分類をとる三例、国立国会図書館蔵百馬図（資料二の二二）、静嘉堂文庫蔵百馬図（資料二の二三）、岩瀬文庫蔵馬之図（資料二の二三 註六八）がある。国立国会図書館の百馬図は一卷に馬百疋をえがき、静嘉堂文庫の百馬図はその後半部分五十疋と馬の形姿とその馬名も一致する。馬名は一例だけを記し、背景もなく、斑文を縞模様や洲浜のような模様にあらわすなど毛色の表現も単純素朴で、童幼の具であるかのようにおもわれる。表現のへだたりはきわめて大きい、東京藝大本系と類似する形姿もみとめられる。

岩瀬文庫の馬之図は、冊子装ながら、図様から直接の原本は画卷と推察される。驥毛図解と同じく馬百三十疋、馬名は驥毛図解と共通するものが多いが、排列は驥毛図解とかなりことなり、形姿とその馬名の組みあわせもほとんどことなる。形姿の類似をゆるやかにかんがえるなら、東京藝大本系にみられない形姿は十七様、三十五疋ほどとなる。東京藝大本系にはなく、驥毛図解にみいだされた三様の形姿がこの馬之図にみいだされることは興味深い、群れのとしての図様の類似はほとんどなく、驥毛図解と祖本を同じくするとはかんがえにくい。馬百三十疋を五性十毛に分類する馬書は、岩瀬文庫の馬之図の原本が先行し、のちに図様のうえで「驥黄物色図」の影響をうけた驥毛図解が成立したのではなからうか。

## 結び

日本の近世絵画において馬は、流派の枠をこえて、厩図や調馬図をはじめとしてさまざまにえがかれた（註六九）。そして牛もま



た、馬には及ばないながらも、少なからずえがかれている（註七〇）。しかしながら、「驪黄物色図」のように、画卷であり、画中に人物をまじえないという条件をみたすものは多くはない。このふたつの条件をそなえる例としては、「驪黄物色図」の模本や類似としてさきにふれた諸本をのぞくとき、狩野探幽の百馬図巻をあげなければならない。

探幽は少なくとも三種の百馬図巻を制作している（註七一）。模本や版本として知られるもので、原本は確認されない。いずれも山野の馬をえがくが、「驪黄物色図」とことなるのは、遠景の馬をもえがいている点にある。近景に遠景、あるいは中景をくわえる場合もあるが、「驪黄物色図」同様、画中の自然描写には全体としての連続性も統一感も希薄である。自然景は続いたり、とぎれたりしながら、背景をつくりなしている。また『画巧潜覧』掲載の百馬図巻では、おおむね勾勒描でえがくなかに、肥瘦のある墨絵風の略筆の馬がまじっている。筆勢の妙をみせるためか、筆法さえも自在にかえる探幽の場合は、駿馬でも放牧でもなく、画卷にあそぶ画馬である。

これら探幽の百馬図巻は、毛色の違いも意識されているが、それをえがくことを目的とはしない。馬たちの群れがさまざまに離合集散するようすを追跡するような、画卷形式の特性を生かした構成が主眼である。個々の馬の形姿には「驪黄物色図」のなかに類似のものをみいだすこともできるが、尚信とその兄探幽の間での図様の共有は当然であろう。ここでは、探幽の百馬図巻のうち二本が、行年書によって、寛文十二年（二六七二）と延宝三年（二六七四）の作、すなわち「驪黄物色図」におかれて制作されていることに留意したい。探幽における百馬図巻の制作は、多様な形姿の馬たちをえがき連ねた「驪黄物色図」に触発された試みではなかっただろうか。

このほか、探幽は寛文六年（一六六六）、江戸城本丸のために、山野にあそぶ牛馬図の屏風を制作している（註七二）。群馬にわ  
御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（二）（小林）

ずかな牛をくわえたこの図様は、牛馬の頭数の不均衡も、人物のみいだけせない点も「驪黄物色図」に近い。この屏風は制作当初から注目をあつめた作品であつたらしく、制作後、おそくとも寛文九年（一六六九）までには弟子によって模写されており（註七三）、複数の模本があつた（註七四）。また、探幽ははじめ三十六名の狩野派の絵師たちは、寛文八年（一六六八）から同十三年（一六七三）のあいだに牛馬図双幅を制作（註七五）、安信ははじめ八名は、貞享二年（一六八五）頃に柳下群牛之図を制作している（註七六）。このような探幽、安信等の牛馬をえがく作品が、尚信の「驪黄物色図」のあとに続出していることも偶然とはいきれない。「驪黄物色図」は牛馬という題材において周辺の絵師たちの制作をうながし（註七七）、江戸時代の狩野派の牛馬図や百馬図のみまもとなつたのではなからうか（註七八）。

またこの時期、狩野家の絵師たちは牛馬にかぎらず、けものをえがいている。『古画備考』によると、寛文二年（一六六二）を制作時期の下限とする毛物尽があり（註七九）、寛文五年（一六六五）林鶯峰の跋をもつ狩野家八名の合作になる群毛図巻があつた（註八〇）。それらはけもの名称や跋から、たとえば細川有孝筆諸獣図（註八一）のような、實在するけものと架空の動物をならべおいた作品であつたとおもわれる。そのような作品であつたとしても、けもの種の識別を念頭においた制作は毛色の識別を目的とする「驪黄物色図」に通ずる。図鑑的制作は、対象の正確な把握と再現描写の意欲を、多かれ少なかれともなうものにちがいない。称徳館本の題辞は、尚信の図を「その筋骨、皮毛、悉く殊相を窮めて、おのずから神観あり」と讃えたのちに、「これ国厩の馬を師とするものなり」と記す。この箇所は、韓幹のことば（註八二）に倣うが、尚信も実際に厩の馬を写生したのではなからうか。馬にかぎっても九十八様にえがきわけた「驪黄物色図」は、実際の毛色の観察なくしての制作は不可能ではなからうか。それは写生にもとづく制作とされる探幽の獼図を想起させる。獼図の制作は探幽の斎書き時代の初期、山下善也氏の推定によれば寛永十二

年（二六三五）から同十九年（一六四二）である（註八三）。制作はこれにややおくれるが、「驪黄物色図」によって、当時、写生への志向が探幽ひとりにかぎられるものではなかったとはいえるだろう。

もちろん絵画制作における写生の役割は、狩野派の場合と、江戸時代後半の写生画や博物画とは大きくことなる。しかしながら、博物写生画において名を馳せることになる関根雲停が、幼い頃に「驪黄物色図」をうつしたことの意義は考慮に値しよう。

「驪黄物色図」は寡作の尚信にあっては、制作の年代や経緯の知られる貴重な作品である。尚信の画技とともに、当時の狩野派における動物をおもな題材とする制作や写生に対する態度を知る手がかりとなるだろう。そして、御花本と比較することによって、雲停が享受した尚信の遺産が実際にはいかなるものであったか、時代と流派をこえた継承がどのように実現されているかもあきらかにしよう。尚信筆「驪黄物色図」の出現を期待したい。

註二四 馬の分類は、馬名がおおむね毛色にもとづく命名であることから、実質的には毛色によって五行に配された。五行による分類は室町時代の『尺素往来』（稀観往来物集成第一巻 大空社 一九九六年）までさかのぼるが、時代や書物によって分類には異同がある。五行による分類は、馬と、馬の持ち主あるいは騎手の生年の五行との組みあわせによって吉とも凶ともなるために〔大坪流活套巻〕 小泉吉永編『大坪流馬術書』岩田書院 二〇〇八年など）重視された。一方で、毛色の相剋を信ずるに足らぬとする意見（人見必大『本朝食鑑』巻之十一 東洋文庫三九五 平凡社 一九八一年）や、旋毛の吉凶についても「強て構ふべからず」という見解（『良葉馬療弁解』『馬学―馬を科学する』馬の文化叢書七 財団法人馬事文化財団 一九九四年）もあった。

註二五 『新訂寛政重修諸家譜』巻第六百三十二。なお、ここでは驪黄物色図を定幸の実兄定矩の著作とする。

註二六 『松江藩学芸史の研究 漢学篇』明治書院 一九八一年

註二七 国立国会図書館ならびに国立公文書館所蔵の写本を参照。

註二八 原念斎『先哲叢談』巻之二 東洋文庫五七四 平凡社 一九九四年

註二九 国立公文書館所蔵写本を参照。

註三〇 『南畝全集』第十三巻 一九八七年

註三一 『大猷院殿御実紀』（『新訂増補国史大系』吉川弘文館 一九九〇年）にみえる馬事の例

・寛永 二年（一六二五）是年、諸士の甲冑戎馬を御覧

この時、「武具馬具殊更おごそかに備て見えければとて、百石づゝ加恩」されたなかに黒沢定幸の名あり

・寛永 三年（一六二六）春頃、家光の騎馬、速きこと風雷のごとく、供奉のものしたがうあたわず

・寛永 十年（一六三三）八月、品川の行殿にて諸番士の馬揃を御覧

・寛永十二年（一六三五）四月、かねてより願っていた朝鮮馬術の技を御覧

・寛永十五年（一六三八）四月、蘭人より献上の方物に、馬あり

・同年 七月、高田馬場にてみずから馬上鞭打ち

・寛永十八年（一六四一）十月、陸奥へ馬の事奉りまかる厩別当に金、時服下さる

・寛永二十年（一六四三）正月、四日、五日、六日、九日、十日、廿五日に鷹狩

・同年 七月、朝鮮国信使の献上品に駿馬二匹あり

・慶安 二年（一六四九）六月、番士の高田馬場乗馬并水泳の調練をうながす

・同年 八月、奥へ馬買にまかる徒金、時服下さる

・正保 二年（一六四五）八月、奥州へ馬買にまかる徒に時服、金給ふ

・正保 四年（一六四七）十一月、松平薩摩守光久張行の犬追物を御覧

註三二 尚信の歿年、享年は『増訂古画備考』や『東洋美術大観』（番美書院 一九〇九年）の慶安三年（一六五〇）四月七日、四十四歳病死にしたがった。

註三三 『隔冥記』第二（思文閣出版 一九九七年復刻）正保三年九月廿七日、十月廿四日、十一月十八日、十二月廿一日の条。

註三四 『隔冥記』正保三年十二月廿一日の条に「明日赴江城」。

註三五 『増訂古画備考』に「元和九癸未、十七而大猷君御上洛之次、拜謁于京師、直奉絵事之命」。

註三六 『増訂古画備考』に「寛永七庚午、奉命下江戸、拜謁台徳君、直奉絵事之命」。台徳君（秀忠）は元和九年（一六三三）七月に大猷君（家光）に將軍職を譲り、寛永七年当時は大御所と称されていた（台徳院殿御実紀、大猷院殿御実紀参照）。

註三七 大田南畝の浅草観音堂絵馬考（註一）もほぼ同文の談を載せる。なお、称徳館本と南畝の記事における定幸末裔（孫）「定紀」は『新訂寛政重修諸家譜』巻第六百三十二では「定記」とする。

註三八 内容を確認することのできた七本は左記の通りである。

- ・東京国立博物館蔵「驪黄物色図」 馬牛 奥書に人見必大写 「驪黄物色図」の序と跋が付属する
- ・国立公文書館蔵「驪黄物色図説」 馬牛 奥書に人見必大写 「驪黄物色図」の序と跋が付属する
- ・同 「驪黄物色図説」 馬牛 奥書に人見必大写
- ・八戸市立図書館蔵「驪黄物色図」 馬牛 奥書に人見必大写
- ・称徳館蔵「驪黄物色図説」 馬牛 奥書（資料一）
- ・静嘉堂文庫蔵「驪黄物色図説」 馬牛 奥書なし 「驪黄物色図」の序が付属する
- ・岩瀬文庫蔵「驪黄物色図説」 馬 奥書なし

これらのなかで、人見必大の奥書はすべて同文で、元禄二年（一六八九）に林鶯峰所蔵の書をうつしたとする。称徳館本では、明和八年（一七七二）伊勢貞丈が新井邦孝（白石の孫）所蔵本をうつしたとする奥書がもっともふるい年紀であるが、定幸の題辞をそなえる唯一の例として貴重である。なお、称徳館本坤巻「駁馬二十疋」の現状は「顛」から「驪」へつづくが、記述内容、

諸本との照合から、原状ではこの間に「落星馬」、「駮」、「玉鼻尖」、「雉」のあったことはうたがえない。

岩瀬文庫本は、現状では馬の部分の記述のみである。

註三九 「驪黄物色図説」において馬九十八疋、牛は十四頭と少ない。また、称徳館本系「驪黄物色図説」の、牛における悪旋毛、凶牛、吉牛との順序も馬の部分との整合性を欠くが、現在の諸史料から、「驪黄物色図説」の原状を確かめることは不可能である。

牛馬の頭数の不均衡は、黒沢定幸の題辞にいうように幕府の厩にあつめられた馬と牛の、ある時点での実際の頭数を反映している可能性もあるが、牛の部分のあつかいも考慮すると、幕府の馬預の職にあつた定幸のより強い関心が牛よりは馬にあつたとかんがえるのが自然ではなからうか。幕府も牛の飼育を奨励しているが（加茂儀一『日本畜産史』財団法人法政大学出版局 一九七六年、梶島孝雄『資料日本動物史』八坂書房 一九九七年）、『本朝食鑑』に牛には牛車をひく官牛、運搬をたすける市牛、農作業をたすける農牛があると記すように、武家の関心は牛へとはむかい難い。

「驪黄物色図説」の林羅山の序も定幸の題辞も馬が軍用いかに大切かを述べ、「驪黄物色図」においても、羅山の序はもっぱら馬を語る。鶯峰の跋は、説卦が乾の象を馬、坤の象を牛とすることや、甯戚の相牛経をあげて相馬と相牛の共通することをい、さらに『周書』から「華山馬嘶桃林牛睡」と引用するが、これは譬えの文言であり、そのような秦平の世にあつても軍用の良馬を備えることは重要であること述べている。

「驪黄物色図」の模本のみならず、「驪黄物色図説」の写本においてもしばしば牛の部分が欠落するのは、馬への関心の強い武家のあいだで転写されたためと想像される。

註四〇 河野元昭「KANO SANSETSU E IL DISEGNO DEI CAVALLI」(日伊文化第一号 二〇〇四年)に紹介。イタリア語

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻(一)(小林)

三八五

論文は熊谷史子氏に翻訳をお願いした。一部分をのぞくほぼ全体のデジタル画像をステイッベルト美術館よりご提供をいただいた。なお、この画卷は修理中とのこと（二〇〇九年）。

註四一 『日本書蹟大鑑』第二十一卷（講談社 一九八〇年）によると、万治二年（一六五九）誕生、享保二十年（一七三五）歿、書家、高松侯につかえた。

註四二 頭数は註四〇論文によった。

註四三 土居次義「狩野山雪の歴聖大儒像」（『近世日本絵画の研究』美術出版社 一九七〇年）

註四四 『先哲叢談』堀杏庵の項。

註四五 註四〇論文ならびに河合正朝「野に群れ遊ぶ馬たちを描いた二つの屏風―狩野探幽筆御本丸屏風をめぐる―」（『写楽幻の肉筆画』東京都江戸東京博物館 二〇〇九年）。

註四六 ステイッベルト本の糟栗毛、御花本の駢（馬94）

註四七 大阪市立美術館所蔵、『日本の馬の絵―中・近世―』（財団法人馬事文化財団 一九八四年）図二一。

註四八 故宮博物院蔵二馬図（『故宮博物院』第三卷 図一三三）のうち。

註四九 大和文華館蔵、中野玄三『日本人の動物画』（朝日選書二九九 朝日新聞社 一九八六年）など参照。

註五〇 『探幽縮図』（文人画研究所 一九八六年）学古帖の五三。

註五一 武田恒夫「鳥類図巻一卷」美術史二一一 一九八一年

註五二 大原美術館蔵、故宮博物院蔵、『白描画から水墨画への展開』（水墨美術大系一 講談社 一九七八年）図四六、四七。



註五三 『絵巻物総覧』（角川書店 一九九五年）など参照。

註五四 故宮博物院所蔵、『故宮博物院』第三卷（日本放送出版協会 一九九八年）図二五。

註五五 香港中文大学文物館蔵滾塵図巻、プラハ国立美術館蔵八駿図巻（ともに『中国絵画総合図録続編』二 東京大学出版会 一九九八年）

註五六 「驢」（馬35）と「駟油馬」（馬40）

註五七 原口志津子「資料紹介 富山県個人蔵隨身乗馬図について」（富山県立大学紀要 第一二巻 二〇〇一年）、また馬の博物館より巻頭と奥書部分の写真をご提供いただいた。

註五八 渡辺雄二「筑前黒田藩御用絵師狩野昌連」（『福岡県史』近世研究編福岡藩二 福岡県 一九八七年）

註五九 花巻市博物館小原茂氏より所在のご教示いただき、後述する台帳の記載などについては称徳館中野渡由美子氏よりご教示いただいた。

註六〇 『日本の馬の絵―中・近世―』、『馬の博物館所蔵品選集増補版』（財団法人馬事文化財団 二〇〇一年）などに部分写真の紹介がある。作品の全体は馬の博物館よりデジタル画像の貸与をうけた。また、末崎真澄氏をつうじて、長塚孝氏より序文に關して詳細なご教示をいただいた。

註六一 立像の馬師皇の図像は劉向『列仙伝』（『列仙伝・神仙伝』）や、これを参考にしたとの指摘のある狩野山雪筆馬師皇図にあるが（林進「山雪『盤谷図』―近世文人画の誕生―」、『日本近世絵画の図像学―趣向と深意―』八木書店 二〇〇〇年）、驥毛図解の馬師皇図はこれらとは服制などがことなっている。

註六二 御花史料館植野かおり氏よりご教示いただいた。

註六三 田能村忠雄「素軒の定家詠花鳥倭歌絵」上、下（国華八〇二、八〇三 一九五九年）、『月次絵 十二ヶ月の風物詩』（滋賀県立近代美術館 一九九五年）

註六四 『増訂古画備考』三十六狩野譜

註六五 資料二の一七は、村井秀夫・松尾信一「石川家威絵巻大坪本流馬相絵について」（日本獣医学雑誌第一七号 一九八三年）に紹介されるもので、図版の掲載はない。現状収録数七十二疋のうち、三十四疋の馬名は東京藝大本系「驪黄物色図」の馬名と共通する。

註六六 小原茂氏より所在のご教示ならびに画像のご提供をいただいた。

註六七 小原茂氏より所在のご教示ならびに画像のご提供をいただいた。この百馬百毛図は寛文八年（一六六八）写、これまで確認した模本類のなかではもっともはやい年紀をもつ。これを模写した瀧波如林乗信の伝は不明である。『増訂古画備考』狩野門人譜に、狩野富信があり、如林、乗信とも名乗るが、その父幸信が延享二年（一七四五）歿、弟察信が享保十七年（一七三二）に狩野免許をうけており、同一人物とするには無理がある。

註六八 この馬之図には安永七年（一七七八）に名古屋藩士で故実家の稲葉通邦の記した奥書があり、原本は京都でみいだされた馬寮馬図とする。馬寮は大宝令にさかのぼる役所（和田英松『新訂官職要解』講談社 一九八三年）であるが、御所の厩馬をえがくものか、これにかかわる人物の編纂か、この題名の意味するところはあきらかでない。

註六九 『日本屏風絵集成』第十六巻走獣画（講談社 一九七八年）、別巻（一九八一年）、『時代屏風聚花』（しこうしゃ 図書販売

一九九〇年）、『御物聚成』絵画Ⅰ（朝日新聞社 一九七七年）などを参照。

註七〇 牛図には、禅宗の十牛図のほか、三玄院蔵牛図座屏、等持院蔵牧牛図襖、住吉如慶筆鹿苑寺大書院四の間小襖の牛図（いずれも土居次義『近世日本絵画の研究』など水墨の作例が多い）。

註七一 探幽の百馬図は、

・百馬之図 一卷 東京国立博物館蔵（百馬図三巻の一）

馬九十六疋

原画狩野探幽七十一歳、寛文十二年（一六七二）筆 享保九年（一七二四）に大久保佐渡守常春所持

・百馬百鶴図巻のうち百馬図 一卷 『画巧潜覧』（大岡春卜編 元文五年刊 国立国会図書館蔵）所収

馬百三疋

原画狩野探幽七十三歳、延宝二年（一六七四）筆

・百馬図 一卷 花巻市博物館蔵（小原茂氏にご教示ならびに画像等のご提供をいただいた）

馬九十六疋

原画狩野探幽 湯川玉流写、明治三十六年（一九〇三）新渡戸仙岳序

註七二 コルフ・アジア美術館蔵野馬図屏風模本、原画は探幽六十五歳の筆、延享五年（一七四八）狩野克信、興信の模写（註四

五『写楽幻の肉筆画』）

註七三 『尾形家絵画資料図版』（福岡県立美術館 一九八六年）三一七一の野馬・水牛図は、むかって左隻右より第三扇の模本で

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（二）（小林）

三八九

あり、小方牛ノ助による模写である（『尾形家絵画資料目録』福岡県文化会館 一九八五年）。小方牛ノ助は探幽の弟子で、福岡藩御抱え絵師尾形家の第二代、牛ノ助を称していた期間は寛文二年（一六六二）から同六年（一六六六）と推定される（拙著『筑前御抱え絵師』中央公論美術出版 二〇〇四年）。

註七四 むかって右隻第二扇をのぞく十一扇分の模本が『尾形家絵画資料図版』四〇二〇から四〇三〇にあり、全体の模本は東京芸術大学に牛馬屏風（『東京芸術大学美術館蔵品目録 東洋画模本Ⅴ』四四三二 一九九九年）としてある。

註七五 静岡県立美術館蔵牛馬図双幅、山下善也「狩野探幽はじめ江戸狩野三十六名合作の牛馬図双幅」（静岡県立美術館紀要一七 二〇〇二年）を参照。

註七六 真田家旧蔵柳下群牛之図、『真田家旧蔵資料目録―絵画―』（松代藩文化施設管理事務所 一九九八年）によると、この図には安信、常信、洞雲、探信、主信、岑信、探雪、洞春の落款がある。主信の生年延宝三年（一六七五）、安信の歿年貞享二年（一六八五）から、後者を制作時期の目安とした。

註七七 制作時期を確定できない作例に、牛馬を対とする狩野探幽筆個人蔵牛馬図屏風（木村重圭「大坂画壇の展開と狩野派―森狙仙筆墨馬図をめぐる―」甲南女子大学研究紀要四〇 文学・文化編 二〇〇四年）、探幽の弟子衣笠守昌の福岡市博物館蔵牛馬図屏風（『筑前御抱え絵師』）、牛のみをえがく狩野常信筆北野天満宮蔵双牛図屏風（京都国立博物館『京都社寺調査報告書』XIV-一九九八年）がある。

註七八 狩野是信筆久本寺蔵富士・馬・牛図三幅対（『知られざる御用絵師の世界展』二六 朝日新聞社 一九九八年）、狩野洞春美信の弟子荒川洞月筆仙台市博物館蔵奔馬図屏風（『仙台藩の絵画』九八、九九 仙台市博物館 一九九三年）、狩野惟信筆字和

島市立伊達博物館蔵馬師皇・百馬図三幅対（『宇和島伊達家伝来品図録』書画二五 宇和島市立伊達博物館 二〇〇七年）、狩野養信の弟子梅沢晴我筆御花史料館蔵百馬図（『柳川の美術Ⅱ』）など。

註七九 『増訂古画備考』四十六合作類及不詳印に、毛物尽筆者として狩野右京時信、左衛門昌信、内記清信、隼人信之、大学氏信、勝田竹翁をあげる。最年長の昌信の歿年をもって制作の下限とした。

註八〇 『増訂古画備考』四十六所収、探幽、安信、常信、益信、時信、信之、氏信、勝田貞寛の合作、たとえば探幽は猿牛馬、信之はきりん、いのしし、狐、河をそ、むささび、しや香をえがいた。

註八一 『動物表現の系譜』（サントリー美術館 一九九八年）図一一三。また、『尾形家絵画資料図版』三九八三も群毛図巻の類の模本とおもわれる。

註八二 『宣和画譜』卷第十三（畫史叢書第一冊 文史哲出版社 一九七四年）韓幹の項に「幹曰、臣自有師、今陛下内厩馬、皆臣之師也」

註八三 山下善也「狩野探幽の獺図と黒田忠之像」〔『狩野派と福岡展』福岡市美術館 一九九八年〕

資料一 十和田市馬事公苑称徳館蔵「驪黄物色図説」の題辞、引用書目、奥書

#### 一、題辞

「驪黄物色圖説題辭／夫戎事之大用者馬也故以名官健而／行不息者亦馬也故以象乾然則馬豈／微物乎哉騰黃之姿龍媒之種周之八／駿秦之七馬漢室之九逸唐家之十驥／自古紀之彼好事者所謂若麒麟若蠅／娘或身有困翅或一形十影如此之妄／言不少余竊為不然吁

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（二）（小林）

三九一

不稱驪之德而／奚語形之怪乎也時／今美平既久惠溢八隅威殷百蠻底貢良／馬如雲錦似白練故余以策數之畢乃／考諸書以引字附諺解以立說總／馬牛一百一十有二配之於五／行亦其來有自矣詩之秣馬既同／禮之毛馬而頌之三代乘其色四／時駕其色旋及匈奴之騎四方騎／其色華夷皆無不然矣加之圖馬／牛之回毛亦其漸有由矣昔自有／河圖龍馬之旋文以來爾雅別旋／毛所在之名馬牛經載逆毛吉凶／之說豈涉于幻妄乎於是使畫工／藤尚信圖之其筋骨也皮毛也悉／窮殊相而自有神觀是師／國厩之馬者也圖說已成而乞題號／於羅浮先生先生誨人不倦即日／曰驪黃物色蓋取諸列子之語下／學物色使是上達天機亦由斯而／進歟嗚乎成周司馬之法延喜馬／寮之制已在／今日矣昔范氏謂之君子國亦不宜／哉／正保丁亥秋八月朔 黑澤定幸書」

## 二、引用書目

「驪黃物色圖說引用書目／詩經 論語／禮記 爾雅／史記 坤雅／爾雅翼 說文／太平御覽 西陽雜俎／世說 韻會小補／篇海類編 字彙／事文類聚 虎鈴經／太白陰經 本艸綱目／安驢集 新編集成／圖像馬經 圖像牛經／療馬集 攷事撮要／倭名類聚鈔 義貞軍記／多識編 家傳書／總計二十有八篇」

## 三、奧書一

「各驪黃物色圖說求得于新井源邦／孝藏本以模寫之了／明和八年辛卯冬十月廿二日／東都扈從隊士伊勢平藏貞丈書印／安永六年丁酉夏四月十八日／田邑節藏書寫了」

## 四、奧書二

「貞文〔傍註、丈〕 曰予往歲於黑澤定紀之家觀／驪黃物色圖二軸及相驢鑑若干卷／▽凡二十／冊許△共其祖定幸所著也定紀談曰／吾祖定幸使狩野尚信▽称主／馬△畫驪黃物／色圖時口授驢骨毛色尚信始覓畫／馬精妙不堪欣喜乃畫于木版掛之／于武州淺草寺觀

音堂壁焉今俗誤／傳以祐清▽称古／法眼△所畫且誣謂畫馬離版／活走食草者是也夫黒沢氏奥州安／倍定任之家族黒沢尻九郎之後胤／也 安永四年乙未春三月七日書」

五、奥書三

「于時文化八歲次辛未春閏二月中旬二日／田村敬則以書阿部正信令寫之所／同九歲壬申穰九月中旬五日 大武源昌豊書寫之」

資料二 「驪黃物色図」模本、類例

一、馬師皇卷 二卷 東京藝術大学蔵

〔東京芸術大学芸術資料館蔵品目録〕東洋画模本Ⅳ 東京芸術大学芸術資料館 一九九八年

馬師皇図、郭璞図、馬図九十八、牛図十四 林羅山序、林鶯峰跋 馬名牛名

原画狩野尚信 狩野常信写、狩野栄川所持、享保十二年（一七二七）長澤如端写

二、驪黃物色 二卷 東京国立博物館蔵

馬師皇図、郭璞図、馬図九十八、牛図十四 林羅山序、林鶯峰跋 馬名牛名

三、馬牛絵古図卷 二卷 チェスター・ビーター・ライブラリイ蔵

〔チェスター・ビーター・ライブラリイ 絵巻絵本解題目録 解題篇〕勉誠出版 二〇〇二年

馬師皇図、郭璞図、馬図九十八、牛図十四 林羅山序、林鶯峰跋 馬名牛名

原画狩野尚信

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷（二）（小林）

一四、百馬及牛毛物弁定図巻 二巻 御花史料館蔵

馬師皇図、郭璞図、馬図九十八、牛図十四 林羅山跋（上巻末）、林鶯峰跋（下巻末） 馬名牛名

原画狩野尚信 画は文化十三年（一八一六）関根雲停写、序跋は文政二年（一八一九）今井元堅写

五、驪黄物色図 二巻 東北大学蔵

馬師皇図、郭璞図、馬図九十八、牛図十四 林羅山序、林鶯峰跋 馬名牛名

原画狩野尚信 狩野如川周信写、文化十四年（一八一七）三浦義信写、奥書藤輝崇

六、驪黄物色図巻 二巻（平成二十年東京古典会展観大入札会目録）二〇〇八年）

馬図、牛図 林羅山序、林鶯峰跋 馬名牛名

七、百馬図 一巻 馬の博物館蔵

馬師皇図、馬図 馬名

長谷川家古絵本 延宝六年（一六七八）写、天明五年（一七八五）田中等昌写

八、馬相図 一巻 ギメ東洋美術館蔵

〔海外所在日本美術調査報告6 パリ国立ギメ東洋美術館絵画〕文化財保存修復学会 一九九六年）

馬師皇図、馬図 馬名

九、百馬図 二巻 早稲田大学蔵（早稲田大学図書館古典籍データベース）

馬図百 馬名（十一疋は無名）



一〇、百馬図画帖 二冊 『もくろく 伯爵有馬家御藏品入札』東京美術倶楽部 一九二五年

郭璞図 馬図（一画面三疋程度）

狩野昌運筆 有馬家旧蔵

一一、百馬卷 一卷 十和田市馬事公苑称徳館蔵

馬図六十 馬名

原画狩野探幽 湯川玉流写、新戸部家旧蔵

一二、百馬図 一帖 岩瀬文庫蔵（『岩瀬文庫図書目録』西尾市教育委員会 一九九二年）

馬図百 馬名

原画狩野友甫宴信 永井主膳蔵本を寛政元年（一七八九）中澤彦次郎写、住吉内記蔵本を享和三年（一八〇三）田口朋良写

一三、驢毛図解 二卷 馬の博物館蔵

馬師皇図（立像） 馬図百三十 馬名

元禄九年（二六九六）原田宗如筆 貞享四年（二六八七）熊谷立閑序 五性十毛歌

一四、百馬図卷 二卷（『京都市書組合総合目録』第十九号）

馬図 馬名

一五、馬四十八種 一卷 馬の博物館蔵（『日本の馬の絵—中・近世—』）

馬図四十八 馬名

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷（二）（小林）

三九五

## 原画狩野安信

- 一六、大坪定易撰馬相図模本 二卷 ギメ東洋美術館蔵（海外所在日本美術調査報告6 パリ国立ギメ東洋美術館絵画）  
馬図百三十二（序文による） 馬名
- 大坪定易撰 元禄十年（二六九七）大高坂季明序、橘保春、有本英達後序
- 一七、大坪流馬相絵 一卷 宮城・石川家蔵  
馬図七十二（解説による現状） 馬名
- 斎藤定易選 元禄十年（二六九七）橘保春、有本英達後序
- 一八、驪黄物色図 一冊 国立国会図書館蔵  
馬師皇図（巻頭）、郭璞図（巻末）、馬図九十八（二丁に一疋から五疋） 林羅山序、林鶯峰跋 馬名
- 一九、百馬之図 一冊 盛岡市中央公民館蔵  
馬図九十八（半丁に一図、一図一馬） 馬名
- 南部家旧蔵
- 二〇、百馬百毛図 一冊 岩手県立図書館蔵  
馬図九十八（半丁に一図、一図一馬） 林羅山序、林鶯峰跋 馬名
- 原画狩野尚信 寛文八年（一六六八）瀧波如林乘信写、寛政六年（一七九四）源光陳序、嘉永三年（二八五〇）横浜慶恵写  
明治十五年（一八八二）大島常次郎入手

二一、百馬図 一卷 国立国会図書館蔵

馬図百 馬名

二二、百馬図 一卷 静嘉堂文庫蔵

馬図五十 馬名

弘化四年（一八四七）写

二三、馬之図 一冊 岩瀬文庫蔵（『岩瀬文庫図書目録』）

馬図百三十、馬師皇図（立像） 馬名

原画馬寮馬図 安永七年（一七七八）稲葉通邦写、吉田氏蔵本を嘉永二年（一八四九）神谷三園写

二四、群馬図巻 一卷 フィレンツェ市立ステイッペルト美術館蔵

馬図三十三 寛永十八年（一六四一）那波活所跋 馬名

原画狩野山雪

付記 本稿がなるにあたっては多くの方々のご助力を得ました。とりわけ植野かおり氏、小原茂氏、熊谷央子氏、そして御花史

料館、東京藝術大学をはじめとして、資料の複写や画像の提供、調査を受けいただいた各機関に心より御礼申しあげます。